

竣工年月日
1926（大正15）年（被爆当時の橋）

架替年月日
1992（平成4）年5月25日

建立者
広島市

設計者



形状

旧 橋：全長49.9m、幅6.95m
架け替え後：全長56.4m、幅16m

特記事項

1 被爆前の元安橋

もともとは、毛利輝元が広島城下を建設したときに架けられた橋で、輝元の祖父・毛利元就の子の元康もとやすが架け渡したことからその名が付けられたと伝えられています。被爆した橋は1926（大正15）年に架けられ、兩岸の親柱の上には、しゃれた球形の飾り照明が、その間には照明灯が設けられるなど、当時としてはとてもモダンな造りでした。

飾り照明などに使われていた金属類は、すべて戦時中に供出され、親柱の上は石の点灯箱に替えられていました。

2 被災状況と爆心地の推定

橋げたは原爆に耐えましたが、親柱の上の笠石は左右逆方向にずれ、欄干も橋の両側にそれぞれ落ちました。この状況から、爆心地は橋の延長線上に位置すると推定されました。

3 架け替え

旧橋は被爆後40年以上にわたって利用されてきましたが、老朽化が進んだため、1989（平成元）年から架け替え工事が始まり、1992（平成4）年に開通しました。

架け替えにあたっては、被爆した親柱4基、中柱2基を利用し、竣工当時を再現したデザインとしました。

4 歴史の証人

元安橋東詰めには、被爆した旧橋の中柱2基が、歴史の証人として保存してあります。